

1	審議会名	市民による事業評価(青少年の育成 第6回)
2	日時	平成25年7月2日(火) 午前10時から正午まで
3	会場	教育委員会第二庁舎 1階 会議室
4	出席者	田村 保 T L 飯塚義隆 S T L、海野友恒委員、小池正彦委員 小岩井礼子委員、佐藤満博委員、杉崎友子委員、関 和弘委員 高橋 仁委員、中村京子委員、山浦正嗣委員、渡辺 務委員
5	市側出席者	浅野生涯学習課長、倉島学校教育課長、佐藤スポーツ推進課長 神林中央公民館長、宮沢生涯学習課課長補佐、高寺青少年係長 中村行政改革推進室長、西沢行政改革推進係長、他行政改革推進室1名
6	公開・非公開等の別	公開
7	傍聴者	0人 記者 0人
8	会議概要作成年月日	平成25年7月8日
協議事項等		
1	開 会	(中村行政改革推進室長)
2	チームリーダーあいさつ	(田村チームリーダー) 以下、チームリーダーを「T L」、副チームリーダーを「S T L」
3	議 事	(1) 前回会議録の確認 ・一部修正を承認 (2) 評価対象事業の説明 ア 「子ども会育成連絡協議会」(以下「協議会」)について ・以降、前回から継続審議 (T L) 前回までの審議の内容についてだが、「子ども会」というものが、これまでの「育成会」というあり方から子どもたちが自主的に運営し、活動体験をする場となってきている点を確認いただきたい。 また、過日、ご案内した「子ども会育成連絡協議会会長研修会」に参加された方がいらっしゃったら感想をお聞かせ願いたい。 (委 員) 城南公民館主催の救急法の研修会に参加したが、女性の参加者が多かった。このような機会がより多く開催されればいいと感じた。 (委 員) 丸子・武石地域で開催された救急法の研修会に参加したが、若干参加者が少ない印象を受けた。子ども会活動に大変役に立つ内容であったので、もう少し積極的に参加されればいいのではと感じた。 また、上野が丘公民館で開催されたK Y T(危険予知トレーニング)講習にも参加したが、研修内容は初めて触れる事であったが、危険予知は子どもの遊びの中でも重要な事だと再確認し、大変参考になった。 (委 員) 今回は参加できなかったが、これまでも参加者が少ないことが懸案であった。 また、過日、青少年育成としての研修会を開催し、子どもたちを取り巻く現状について具体的に講演を聞いた。今後多くの方に聞いてほしいとても充実した講演内容であった。 (委 員) 塩田公民館主催の研修会に参加した。参加した方が、研修内容を地域でどの程度伝えられるかがポイントではないかと感じた。 (委 員) 西部公民館主催の研修会に参加した。ここでも子供を取り巻く現状について具体的な話が聞けたが、「引きこもり」について、その予備軍まで含めると225万人との話を聞いて驚いたところ。 また、便利で快適な生活は子どもたちの生活から大切な3つの「間」、「時間」、「空間」「仲間」を奪ってきた、との大切な話も聞いてきたが、参加者がもう少し多ければと感じ

た。

( T L ) これまでいくつかの事業について今後どのようにしていったらいいのか審議してきたが、話の中で共通して「家庭のあり方」が話題に上ってきた。そこで、「家庭」への働きかけについてはどのようにしていったらいいのか、についてご意見をいただきたい。

( 委 員 ) 同じ地区で子どもたちと一緒に育てる仲間として親同士のコミュニケーション、つながりづくりが必要と思う。そうすれば子ども同士も自ずと仲間になっていくのではないか。

( T L ) ( 核家族ではなく ) 同居世帯が多かった頃は、コミュニケーションについては心配がなかったと思う。

( 委 員 ) 過日、委員どうして話した際、「親の意見と茄子の花は、千にひとつも無駄(仇)はない」という言葉を聞いた。家庭の中で、そういった言葉に込められた意味を伝承していく会話も減ってきてしまったことは残念に思う。

当初、会議で配られた「かわいい子には体験を！」のパンフレットも大変いい資料と思うので、積極的に活用して家庭生活の大切さを啓蒙していくべきと思う。

( T L ) 知恵として引き継がれていくものが切れてしまっている。それは、親の責任でもあるし、年配者にも責任はあると思う。受け継がれていくべきものが、便利な生活とともに伝承されなくなってしまった。

では、(それを防ぐため)親としてどうあるべきか、と家庭に指導はできるのだろうか。

( 委 員 ) ( 伝承されなくなった ) 原因は、核家族化やテレビにあると思う。テレビがあることで家族間の会話が無くなった。また、地域でもコミュニケーションが足りないと感じている。

( T L ) 今、学校の中では、子どもたちの尊敬語、謙譲語、丁寧語が正しく使われていないことに苦慮している。授業では習い、知識としてはあるが、使わなければならない場面に立ち会う経験が少なくなっていることが原因と思う。言葉の使い方も含めて、知恵として引き継がれていかなければならないことがあると思う。

ただし、親としてどうあるべきか、ということについて外部から指導することは難しいのではないか。

( 委 員 ) 常々、家庭が大切であると申し上げてきたが、現代は少子化で、きょうだい、いとこ、相談できる近所のおじさん、おばさんが少なくなってしまった。

そこで、学校や家庭の他に、子どもが集まる居場所を作ることが大切でないかと思う。家庭と学校をつなぐ架け橋になる、子どもの居場所を地域で作ることができれば素晴らしいと思う。子どもたちも居場所がなく戸惑っているのではないか。

( T L ) 「子ども会」を、その居場所として機能させることもできるのでは、というご意見と受け止めた。

家庭で補いきれない部分について、地域と連携しながら子どもたち自身が作る活動を通して、身に付けることができれば知恵の伝承もできていく。

( 委 員 ) 子どもたち自身に考えさせることも大切ではないか。

( T L ) これまで意見を伺ってきたが、家庭で補いきれない部分について補完する場として「子ども会」を発展させていくことが考えられるのではないかと思う。

#### イ 「地域住民による学校支援事業」(以下「支援事業」) について

- ・資料に沿い、浅野生涯学習課長、倉島学校教育課長から事業概要を説明
- ・以降、審議

( T L ) 過日、現場視察をしたが感想、意見を伺いたい。

( 委 員 ) 学校支援は、継続して行うことが大切だと思う。

( 委 員 ) 当日は参加できなかったが、視察先の中学校には別の立場から関わっている。

何度か中学校に伺ったことがあるが、その際、こちらが挨拶をすればもちろん生徒も挨拶をするが、生徒の方から挨拶をされたことは少なかった。支援事業はどの程度効果があるものと考えているのか。

( 委 員 ) 中学校の視察の際、見学したクラスは保護者も参観していたが、どのような授業内容だ

ったのか分かれれば教えていただきたい。

また、支援事業を紹介したパンフレット「地域ぐるみで育てよう」中の、支援事業により変化が見られたかどうかのアンケート結果を見ると、学校職員と生徒との受け止め方に差異がある。生徒にとっても違和感を感じるものとなっているのではないか。

(事務局) 視察の際、見学したクラスは特別支援学級で、通常の授業風景とは若干異なる様子だったと思う。

(T L) それぞれの子どもの成長に応じた授業の仕方があるのが、保護者とともに登校してくる場合や、今後について保護者との話し合いも兼ねての授業であったかもしれないので、通常のクラスの様子とは違った印象を持たれたかもしれない。

(委員) 視察した中学校では時間の都合もあり、ボランティアの支援の様子があまり拝見できなかったのが残念だったが、支援ボランティアの方の話を聞くと、それぞれ非常にいきいきと活動されており、そのような姿に子どもたちが触れる事によっていい効果が表れてくるのではと感じた。

また、視察の際に校内ですれ違った子どもの中には、自ら挨拶をする子どももいたので、悲観することはないのではと思う。

(委員) 私も、校内ですれ違う子どもたちは挨拶がよくできている印象を受けた。

(委員) 子どもたちも、校外からの来客者にはきちんと挨拶ができているようだ。

しかし、この支援事業も程度を超え過ぎてしまうと、子どもたちの自主性や主体性が損なわれてしまうのではと危惧もする。今の中学生が大人になり社会を担っていく頃は、人口構成も今とは大きく変わっていることを考えると、今の教育をしっかりとやっていくことが必要と思うが、あまり手を掛け過ぎると主体性が育たないなど、逆効果になることもあるのではと心配もする。

(T L) 挨拶の話だが、日常と非日常の違いが表れていると思う。来客者にはきちんと挨拶もするが、校内で日常的に出会う人には挨拶もなおざりになってしまうとすると、本当の力になっているのか疑問も出てくる。

(委員) 校内では挨拶ができるのに、登下校中にはなかなか挨拶ができない子が多い。やらされて挨拶をしている感じを受ける。

(委員) 子どももそうだが、大人でも挨拶ができない人が多い。

自分は建設業に携わっていたが、現場責任者が下請け業者の従業員にも挨拶をし、声を掛けることができている現場は、仲間としてまとまり事故も少なかった。

(委員) 私も、視察した中学校では挨拶ができていると感じていた。近所でもこちらから声を掛ければ挨拶を返してくれることが多い。親同士が声を掛けあい、コミュニケーションをとっていけば、自ずと子どもたちも地域の行事に参加するようになるのではないか。

(委員) 先程、子どもたちに支援し過ぎているのではとの意見があったが、学校支援に入る大人と生徒がともに花壇整備をするなど、一緒に作業をする雰囲気であればいいのではないか。

また、子どもたちも挨拶ができる子とできない子がいるが、教員にも同じことが言える。そういったことも改善が必要ではないかと感じている。

(T L) 「支援事業」の効果はどうだろうか。子どもたちに本当の力を付けさせるためのものとなっているのだろうか、逆効果になってしまっていることもあるのではないか。この点を考えていくことで、今後の支援のあり方も見えてくると思う。

本日は、時間となったのでこれまでとしたい。

### (3) 次回以降の開催日程について

- ・第7回 平成25年7月16日(火)午後1時30分から
- ・第8回 平成25年7月30日(火)午前10時から